

有田郡吉備町

# 土 生 古 窯 跡 群

広域遺跡群詳細分布調査概報

1991. 3

和歌山県教育委員会

# 序

和歌山県教育委員会では昭和61年度から県下の貴重な埋蔵文化財の保存と活用を図ることを目的として広域遺跡群詳細分布調査を実施してまいりましたが、本年度は有田郡吉備町に所在する古代窯跡群を対象としました。

この窯跡群については古くからその存在が知られていましたが、詳しい内容については分かっていませんでした。今回の調査によってこの窯跡群が県下最大規模のものであり、凸面布目瓦という非常に特徴のある瓦や須恵器を焼いたものであること等が判明し、貴重な成果を得ることが出来ました。

ここに発掘調査の概要報告書を刊行します。本書が県民の皆様のみならず研究者の方々の御参考になれば幸いと存じます。

さいごに、この調査を実施するにあたり、ご協力を頂いた関係者の皆様に厚く御礼申し上げるとともに、埋蔵文化財保護行政に、より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます次第です。

平成3年3月31日

和歌山県教育委員会

教育長 高 垣 修 三

## 例 言

- 1 本書は、国庫補助事業平成2年度広域遺跡群詳細分布調査の概要である。
- 2 事業の一部は、財団法人和歌山県文化財センターに委託し実施した。
- 3 調査にあたって、和歌山県文化財保護審議会委員羯磨正信・巽三郎・都出比呂志・藤澤一夫各氏の指導助言を得た。
- 4 調査の組織は以下のとおりである。

和歌山県教育委員会

財団法人和歌山県文化財センター

文化財課 課 長	北野全美	事務局 局 長	鍋島伊津夫
副課長	堀代喜蔵	次 長	菅原正明
主 幹	高橋 彬	管理課長	辻林 浩
文化技術班々長	吉田宣夫	埋蔵文化財課々長	松田正昭
主 任	藤井保夫	主 査	山本高照

- 5 現地調査は山本が担当した。調査中、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部の大脇潔氏にご指導いただいたほか、吉備町教育委員会社会教育課長川嶋重明、同社教主事岩本良憲両氏より援助を得た。
- 6 磁気探査については奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの西村康氏にお願いした。忙しい中お引受け頂いた西村氏に御礼申し上げたい。
- 7 本書の執筆は磁気探査の項を西村康氏、それ以外を山本が担当した。執筆にあたり大脇潔氏から教示を得た。
- 8 調査にあたって使用した方位はすべて磁北である。当地方の磁針方位は1979年現在で西に約6度10分偏している。

# 応域遺跡群詳細分布調査概要

## 1 はじめに

調査対象は有田郡吉備町土生に所在する古代窯跡群である。この窯跡群については、蜜柑畑や山林に須恵器片や瓦片、窯壁塊が散乱していたことから、古くよりその存在が確認されていたが、今まで本格的な発掘調査が行われたことがなかったので、その規模や存続期間、窯体の構造等については明らかでなかった。

## 2 位置と環境

窯跡群は有田川左岸の低丘陵上に営まれている。「土生」という地名が示す通り良質の粘土を産出し、今も「瓦屋」が数軒操業している。

周辺の代表的な遺跡には6世紀後半から7世紀にかけて営まれた藤並神社古墳や5世紀の陶質土器が出土した野田地区遺跡、弥生時代の大規模な集落跡である田殿小中遺跡がある。藤並神社古墳は大型の方墳で内部に巨大な石を使用した横穴式石室をもち、窯跡群の背後関係を知るうえで重要である。

目を有田川北岸に転ずると、この窯跡群との関連で注目される田殿廃寺跡がある。この廃寺跡は今まで本格的な発掘調査が行われていないので詳しいことは分からないが、有田郡で唯一の白鳳寺院である。

## 3 調査

調査はまず土生の丘陵全域を踏査して遺物の散布状況を把握することから始め、次に窯跡が存在する可能性が強い地域について磁気探査を実施し、その結果を受けて部分的な発掘調査を実施した。

なお、調査にあたっては丘陵を地形によって区分し、それぞれの小字名の略称をもって呼称することにした。

### HJZE（地藏山東）地区

3基の窯跡を発見し、それぞれについて部分的な発掘調査を実施した。いずれも白鳳期の瓦窯である。

1号窯では階段式の焼成部を確認した。階段の幅は約0.35mあり、凸面布目平瓦と須恵器杯身が出土した。

2号窯は1号窯の南に位置している。焚口部を検出したが遺存状況は非常によく、窯壁は天井部近くまで残っている。調査範囲が狭く危険なため、床面まで掘り下げることはできなかった。窯の埋土中から白鳳期の複弁蓮華文軒丸瓦や中世の瓦器椀、土師器椀が出土した。

3号窯は2号窯の南に営まれている。窯壁と床面の状況から3回作り直されていることが判明した。最後の窯体は当初よりかなり短く作られていて、その規模は、長さ3.7m、焚口部での幅0.65mを測る。焚口部の両側には平瓦が一枚ずつ立てられていた。

これら3基の瓦窯のほか、この地区では陶棺片が採取されている。

### HJZW（地藏山西）地区

試掘坑を5箇所設定して発掘したところ須恵器窯の灰原を3箇所で見出したほか、焼面を1箇所を確認した。この焼面も須恵器窯に伴うものと思われるので、この地区では少なくとも4基の窯が存在することになる。これらの窯の操業時期は、出土した遺物からみて6世紀後半から8世紀初頭に及ぶ。

### HJY（城山）地区

丘陵の北側斜面で瓦と須恵器の散布しているところが2箇所あり、少なくとも2基の窯が想定できる。瓦には凸面布目平瓦が含まれているのでHJZE地区の窯と同時期に操業していたものと思われる。

### HFR（風呂ノ谷）地区

丘陵東側斜面に須恵器が集中して散布するところがあるので1~2基の窯が想定できるが、窯体は宅地開発で既に破壊されている可能性もある。時期は8世紀。

### HHT（東谷）地区

2基の窯跡を発見した。1号窯は丘陵東側斜面に営まれている。農道と重なっているので深く掘り下げられなかったが焼土を確認している。2号窯は丘陵西側斜面に立地している。焼成部と焚口部付近を確認。

## HDA（出合）地区

かつて農道建設の際に須恵器が発見されている。今回、窯の確かな位置を確認するため磁気探査を実施した。窯の時期は8世紀。

## 4 磁気探査

### はじめに

ここにおける探査の目的は、瓦窯の位置や規模さらには形態などを、推定することであった。そこで、窯跡のように熱残留磁気を帯びた遺構探査に有効な、磁気探査の方法を採用することにした。現在行われている考古学の磁気探査では、遺構の示す磁気異常の地点を特定するために、二種類の方法が採用されている。地球磁場の全磁力を測るものと、磁気傾斜を求めるものとである。今回この窯跡群では、二種類の方法共に実施した。いずれの測定方法でも、微細な磁気変化を測定する必要があるので、遺構よりも大きな磁気異常をもたらすもの、例えば自動車や電車あるいは人家や高圧線などがあると、正確な測定ができない。測定対象地では、そのほとんどが蜜柑畑であり、スプリンクラー、若木の鉄製支柱などが多く存在しており、測定の大きな障害となった。したがって、磁気探査の条件としては、相当困難な環境であったといえる。

### 測定の方法

今回の窯跡群で使用したのは、全磁力を求める方法では、アメリカ・ジオメトリクス社製G856プロトン型の磁力計、磁気傾斜を測るには、イギリス・ジオスキャンリサーチ社製のFM18フラックスゲート型グラジオメーター、の各装置である。

それぞれの測定要素としては、前者は、地球磁場を構成する三成分のそれぞれのベクトル量を合成した全磁力、後者では、一要素である垂直成分の差分をとるもの、という違いがある。さらに測定の原理から、プロトン型では探査の有効深度が2~3mに及ぶと見られるに対して、フラックスゲート型では1m強程度という差もある。

しかしながら、今回採用した装置では、測定の速度はフラックスゲート型の方が速く、

プロトン型では遅い。そこで、対象となる面積が広いところから実際の測定では、フラックスゲート型によってまず大まかな情報を得た後、遺構が存在する可能性のある部分について、プロトン型によって詳細に測定する、という二段構えの方法を採ることにした。

実際に測定を実施してみると、磁気傾斜測定のみでも、窠体の位置が十分に測定できる測定区もあり、そこでは全磁力測定を省略することとした。以下では、今回対象とした測定区の内から、HJZE 地区における磁気傾斜測定の結果をとりあげて、紹介することにする。

測定に際しては全測定区において、予め設定してあった等高線と平行する形の測定範囲で、1m間隔で読定をした。作業に要した時間は、測定区の地形によって異なるが、以下に紹介する HJZE 地区の例では、約60×17mと、20×14mに分割した範囲の両方を、約半日で測定できた。

## 測定の結果

HJZE 地区は、今述べたように南北二つの測定区に分割している。それは、北側3分の一では等高線の走る方向が南とは異なることと、分割した間に山道があるという地形的な違いから、便宜的に区分したものである。そして、この両測定区の設定は、それぞれの北側と南側が一部重複していて、設定基準となる方向は異なる。

<南測定区>ここでは、測定区の南半部中央にスプリンクラーと電柱、その支線、及び、石垣中に積まれた鉄缶に起因する、大きな磁気異常が集中する。また、測定区の西辺では等間隔に2箇所、やはりスプリンクラーによる大きな異常がある。しかし、詳細にこれら異常の地点を検討すると、必ずしも鉄製品のみによる異常とはいえないことに気がつく。その一つが西辺の北側にあるスプリンクラーの東の地点である。

この地点では、鉄の磁気異常から派生するように、30 n Tを超える異常が東南東へ延びる。これの北側には、僅かながらマイナスの異常も伴っており、窠体である可能性は大きいと考えた。窠体の先端部は石垣の中にあると見られるが、全長は4-5m以上と推定できる。方向はほぼ東西にとるが、東でやや南に振れているといえよう。

今あげた地点は、窠体の存在する可能性が大きいと考えた箇所であるが、これ以外にも可能性は小さいが、何等かの方法で窠体の存否を、確認しておいた方がよい地点があった。いま指摘した地点の、北北東約14mにある完結した磁気異常である。周囲と比較すると15 n T程度の異常であるが、それが完結した形態を示すところから、注目する必要があると考えた。すなわち磁気強度は距離の三乗で減衰するので、もし、窠体が深い位置に存在するとすれば、この程度の異常としてしか観測できない可能性があるわけである。

この地点のすぐ北に接して、マイナスの異常が広がっている。これは次に述べる北測定区にある、窯体に起因する磁気異常の一部である。

＜北測定区＞この測定区の南側の一部が、南の測定区と重複していることは先に述べたが、重複した部分には東西方向に山道があり、その崖面には窯体の存在を示す赤色に変化した土が観察できる。測定区の南辺に近い部分で、大きな磁気異常を示す箇所は、この崖面に露出する窯体に起因するものである。

磁気異常の規模からみると、窯体は長さ6～7mあり、ほぼ東北東の方向にあるものと推定できる。この測定区には、これ以外に注目すべき磁気異常は見られない。

### おわりに

土生古窯跡群 HJZE 地区における、磁気傾斜測定の結果は以上のようなものである。ここではスプリンクラーなどがあったため、測定には制限を受けた。したがって、いま指摘した地点以外にも、窯体が存在する可能性はある。鉄製品の大きな磁気異常の中に埋没していて、検出できない窯体があるかも知れないのである。本測定区で遺構の有無を設定する場合には、この点を充分に理解しておく必要があるであろう。

## 5 遺物

瓦・須恵器・土師器・瓦器が出土した。

### 瓦

三重弧文軒平瓦、複弁蓮華文軒丸瓦、凸面布目平瓦等がある。

### 須恵器

杯蓋・身、甕、高杯が出土したほか、陶棺片を表面採集している。HJZW 地区出土の須恵器が最も古く6世紀後半に遡る。陶棺は藤並地区遺跡に次いで県下で2例目の発見である。おそらく藤並地区出土例もこの窯跡群で焼成されたものと思われる。

### 土師器・瓦器

土師碗、瓦器碗がある。いずれも13世紀のものである。



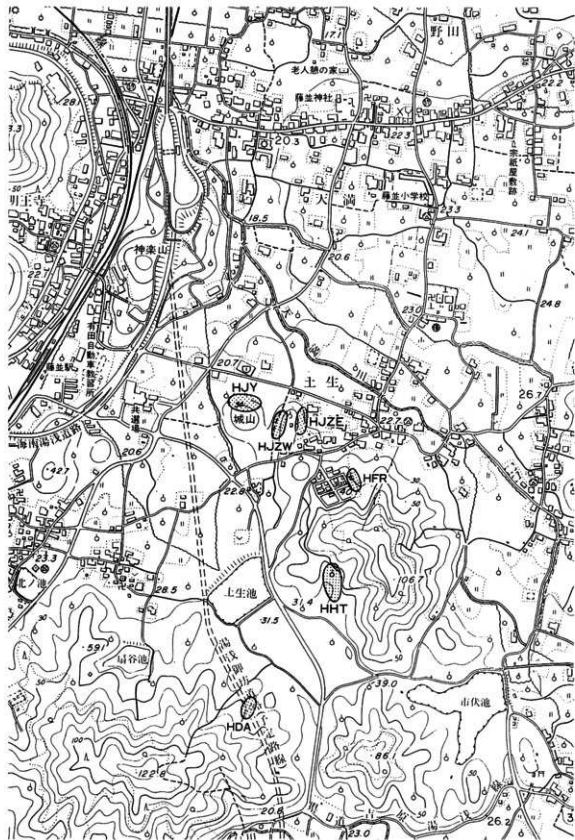
## 6 ま と め

調査の結果18基の瓦・須恵器窯を確認することができた。この数は県下で最も多い。操業時期は6世紀後半から8世紀代である。

3基の瓦窯については、製品の供給先の解明が今後の課題となる。一応の供給先として、有田川北岸の田殿廃寺が上げられるが、軒丸瓦の文様が少し相違するし、凸面布目平瓦が当該廃寺では出土していない等、廃寺の実態が不明な現在の状況では積極的に供給先とすることはできない。

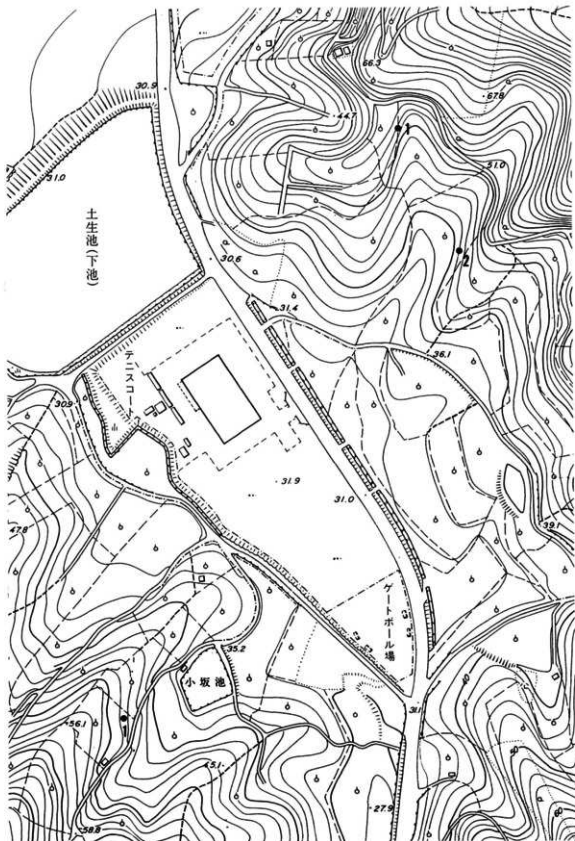
古窯跡群周辺では、現在大規模開発が盛んに行われているので早急に窯跡群の保存策を講じる必要がある。

今回の調査成果がそのための一助となれば幸いである。



土生古竈跡群位置図 1 : 10,000



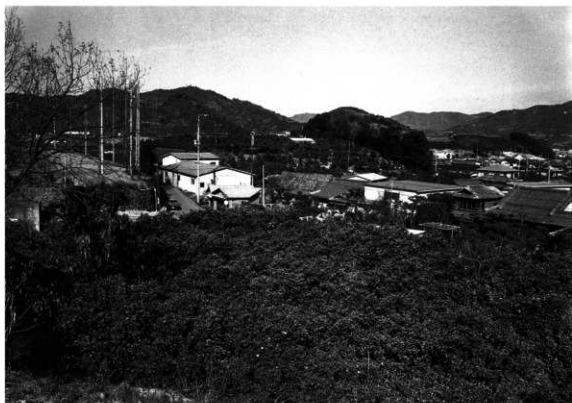




土生古窯跡群遺景(南西から)



土生古窯跡群遺景(北西から)



HJZE 地区全景(東から)



HJY 地区全景(東から)



HHT 地区全景(南西から)



HHT 地区全景(北から)



HFR 地区全景(東から)



HDA 地区全景(東南から)

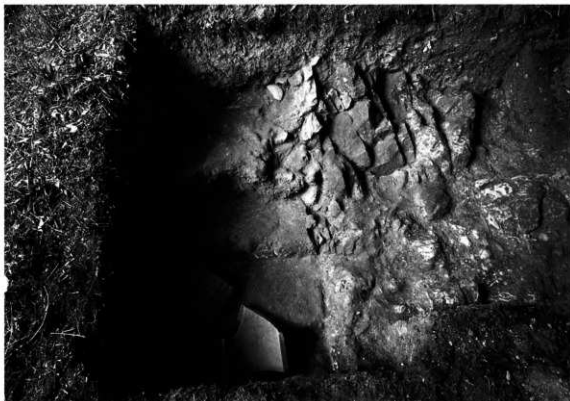




HJZE 1号窯焚口・焼成部(東から)



HJZE 2号窯焚口部(北から)



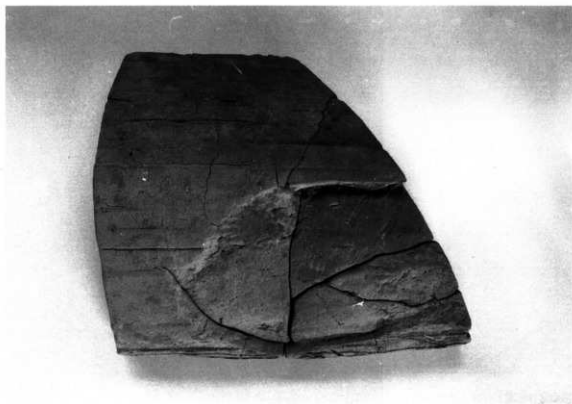
HJZE 1号窯焼成部(東から)



HJZW 1号窯トレンチ(南から)



HJZE 2号窟出土軒丸瓦



HJZE 1号窟出土平瓦

